Osaka University Knowledge Archive

Title	〔資料紹介〕慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 1994, 16, p. 1-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67357
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〔資料紹介〕

慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』

山崎　淳

凡例

一、本文は慶応義塾大学附属図書館蔵『西行繪詞』を底本として、正確に翻刻することにつとめた。

一、和歌は二字下げとし、上に歌番号を施した（126は一二六番歌を、1822は一八二二番歌を示す）。猶、一四番歌、二三番歌、七四番歌の次の和歌は異本による注記なので歌番号は付していない。

一、「しか〳〵の絵有之」等の絵の注記は四字下げとした。

一、底本の頭書は〔頭注〕として、できるかぎり底本での位置の近くに挙げた。

一、見せ消・抹消・補入等、底本における訂正は改めずそのまま翻刻した。

一、句読点は私に施した。

一、絵の注記の後に校異を挙げた（注記の後に挙げなかった箇所も一部ある）。仮名遣い・漢字の用字の違い、「む」と「ん」、「もて」と「もつて」、「世中」と「世の中」、「被召て」と「召されて」、「殊」と「殊に」、「誠」と「誠に」、「泣けれは」と「なきけれは」のような異同は原則としてとっていない。また底本において見せ消・抹消による訂正がある場合、消された文字に異同があっても細字が他本と一致すれば校異として挙げていない。

一、校異に用いた伝本の略称は次の通りである。

（国）―国立国会図書館蔵本

（京）―京都大学文学部国文科研究室蔵本

（岩）―岩国徴古館蔵本

このうち国立国会図書館蔵本には朱での傍訓が多いが、特に問題にならない限り校異としては挙げなかった。また朱での見せ消は無視した。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

解　題

はじめに

『西行物語』には「西行繪詞」と題されるものがある。現在、慶応義塾大学附属図書館蔵本（以下、慶大本）、国立国会図書館蔵本（国会本）、京都大学文学部国文科研究室蔵本（京大本）、岩国徴古館蔵本（岩国本）の四本が確認されており、広本系、略本系、采女本系、永正本系に分類される『西行物語』の中では（1）、永正本系に属する。この伝本については、既に秋谷治氏が「寛永本『西行物語』考―『西行物語』原型を探る―」（「一橋論叢」86―5　昭和56・11）という論考を発表されており（以下、秋谷氏に従い「西行繪詞」を寛永本と呼ぶ）、氏は寛永本を、書写年代は近世まで下りながらも、成立は永正本の書写された永正六（一五〇六）年以前であるとされ、なおかつ『西行物語』原態を考える上で重要な伝本と位置付けられた。しかし寛永本本文は未紹介なので、今回、慶大本の翻刻、解題をさせていただくことにした。

一

慶大本の簡略な書誌を記すと次のようになる。請求番号一四一・九三・一。寸法、縦28・7センチ、横20・2センチ。外題「西行繪詞」（題簽）、内題「西行繪詞」。墨付四十二丁（西行繪詞分のみ、合冊された『伊香保日記』を含むと全七十三丁、前後に遊紙一丁ずつ）、一面十行書き。所々に略本系による異本注記あり。漢字の訓みと和歌右上の「新古」「千載」等の注記は朱で施されている。

奥書から、桑名藩に仕えた近世初期の儒学者、三宅澹庵により寛永十七年（一六四〇）四月下旬に書写されたこと、西行の歌集や『千載集』等により頭書、異同を加えたことがわかる。最後の絵の注記の後に記される部分も含めて奥書を見ると、

A此繪詞、山家集にかうがへあはすれば、やゝことたがひたるやうにおぼゆる事もはべれど、安嘉門院四条がかける不知胥日記に、天龍の渡といふ舟にのるに、西行がむかしも思ひ出られていと心ぼそしといへるは、此詞をおもへるなるべし。されば、はやくよりつたはりけるものなりと、見る人信をとるべきにこそ。（濁点は私、以下同じ）

B寛永庚辰之夏、卯花月下浣、一覧之次、令侍史寫留焉畢。且考家集并千載集等、加頭書、以聊辨異同云。

澹菴子柔（花押）

C詳考此詞、西行行状、更無次第。唯採所詠之哥、牽強附會以為説耳。若夫供佛櫻花之詠、既載千載集、何為臨終之哥哉。如此之類、比々皆是然。亦其中不無實事、唯云不可尽、信焉而已。

とあり、特にCが次の『澹庵歌話』と多く重なる（2）。

又、大ニイブカシミオモヘルコトハ、西行ノ事、図説シタル絵詞ト云モノニ、建久九年二月十五日朝、往生ヲ遂ニケリトカキタレド、此絵詞ハ、山家集ナドニモマヽタガヒタルコトオホカリ。タヾ西行所詠之歌ヲ採テ、牽強付会シテ作リナセリトミエタレバ、其中マコトナルコトモナキニハアラザナレド、尽ニシモウケナヒガタシ。

この部分に続いて『澹庵歌話』では、

慈鎮和尚拾玉集云、文治六年二月十六日未時、円位上人入滅、臨終ナド誠ニメデタク、存生ニフルマヒオモハレタリシニ更ニタガハズ、世ノ末ニアリガタキヨシ申アヒケリ、其後、ヨミヲキタリシ歌ドモ思ヒツヾケテ、寂蓮入道ノモトヘ申侍シ、

君ヤシル其二月ト云置テ詞ニ負ヘル人ノ後ノ世

風ニ靡ク富士ノ煙ニタグヒニシ人ノ行エハ空ニシラレテ

チハヤブル神ニ手向ル藻塩草カキアツメツヽ見ルゾ悲キ

是ハ、願クハ花ノ下ニテワレ死ナン其キサラギノモチヅキノ比　トヨミオキテ、ソレニタガハヌ事ヲ、世ニモアハレガリケリ、又、風ニナビクフジノ煙ノソラニ消エテユクエモシラヌワガ思ヒ哉　モ此二三年ノ程ニヨミタリ、是ヲワガ第一ノ自嘆歌ト申シコトヲ思フナルベシ、又諸社十二巻ノ歌合、大神宮ニマイラセント営シヲ、受採テ沙汰シ侍キ、外宮ノハ一筆ニカキテ、既ニ見セ申テキ、内宮ノハ、時ノ手書ドモニカヽセントテ、料紙ナド沙汰スルコトヲ思ヒテ、三首ヨメルナリ。定家卿拾遺愚草云、建久元年二月十六日、西行上人身マカリニケルヲ、終リ乱ザリケルヨシヲ聞テ、三位中将ノモトヘ、

望月ノ比ハタガハヌ空ナレド消ケン雲ノユクヘカナシナ

上人先年詠云、ネガハクハ花ノ下ニテ春シナン云々。今年十六日望月也、返シ、三位中将

紫ノ色トキクニゾナグサムルキエケン雲ハカナシケレド

モ　今考、文治六年四月十一日改元、為二建久元年一。今年二月大也。月大ナレバ十六日望ニシテ、月小ナレバ十五日望也。拾玉ニハ改元以前ノ年号ヲカヽレ、愚草ニハ改元以後ノ年号ヲ載ラレタリ。

となっており、これは頭注⑬とほぼ同文である。Aは定かでないが、Cや頭書は澹庵自身によるものとみてよいだろう。

国会本、京大本と比較した時、慶大本が善本であると認められるのは、秋谷氏の指摘通りである。国会本と京大本の相違は、頭書が前者にはあり、後者にはないことだが、慶大本との異同に一致が多いこと、特にCを同じ所から欠くことから二本は近い関係にあるといえる。慶大本は二本の親本の如き位置にあるのだろう。また京大本は22番歌から39番歌にのみ「新古今」「千載集」の注記があるという不自然さを持ち、親本の頭書を殆ど無視して書写されたと考えられる。岩国本は京大本と同様、頭書がなく、さらにABCも欠いているので、寛永本原形に近

いとみることもできるが、大きな脱文（十九頁参照）や、意味をよく理解しないまま書写している箇所がある。やはり四本の中では慶大本が最善本といえそうである。

二

秋谷論文で指摘されたように、寛永本と永正本を比較すると、寛永本本文の先行することがわかる。以下、秋谷氏の触れられなかった箇所を数例挙げてそのことを確認してみたい。

まず西行が武蔵野で会った隠者の庵の描写は、寛永本では次のようになっている。

…恋しき草の色なれば、紫の草のゆかりもなつかしく、書よりも心のすみければ、尾花葛原分入て、かたぶく月に付ても都の方を打詠て、心をすまして有けるに、（中略）萩、女郎花などあだに折かけたる庵に、齢七十斗なる老僧の一人有けり。仙人などの栖やらんと覚て立出て、いかなる人にて是程の野中に、只一人角てはおはしますぞと問ば、（中略）薄、苅萱をのれとかこふ住居にて年月をへぬる也と答ければ、…

『西行物語』諸本では、傍線を付した植物はどのような並びになっているのだろうか（3）。以下に列挙してみる。

・萩、荻、をみなめしをかこひにはして、すゝき、かるかやをうゑにはふきて（文明本）

・わづかなるいほりのうへをば、すゝき、かるかやにてふき、萩、女郎花、色々の秋の草にてめぐりをかこひ（久保家本）

・あたりには、きゝやう、かるかや、女良花、しをん、りんだう、我もかうなんどいふ、秋の草を、いほりかけて（永正本・「室町時代物語大成」五）

寛永本は「薄、苅萱」が隠者の言葉に取り込まれているとはいえ、原態に最も近いとされる広本系（文明本）の順序を踏襲している。略本系の久保家本にしても、広本系の本文を並び変えたにすぎない。ところが永正本の場合、広略いずれの本文からも直接出てこないような並びとなっている。この永正本の並びは、『浄瑠璃御前物語』に、

百しゆのはなの、なかよりも、ききやう、かるかや、をみなめし、しおん、りんだう、われもつかう…（四段　せんすいそろえ・「室町時代物語大成」七）

という同一のものを見出せる。『秋月物語』にも同じ並びがあり、おそらくこれは草花の名を列記する時のイデオマティックな表現であったのだろう。永正本はそのような表現を用いて改変されたと考えられる。

次に挙げる表現は、永正本系のみに見えるものである。

・せきせうが谷の金も命に替る事なく、とうれいが銅も冥土のためにはよしなし。漢王の三尺の釼も閻魔の使を切事なく、秦王の一面の鏡も有為の宝にはならず。（寛）

・いかゞせきけうが谷の金も、命をかふ、ちからなければ、

冥途のためには、ようなし。かんわうの、三尺の釵も、魔の使をきる事なし。始皇が一面の鏡も、りんじゆの影を、うつす事はなし。（永）

傍線部は、頭注⑪にあるように「石崇金谷・鄧通銅山」という中国の故事であろう。後に続く漢の高祖、秦の始皇帝の故事が対句になっているので、永正本に「鄧通銅山」の脱落があると考えるべきであり、寛永本で補い得る部分である。

ただし右の二例は、たまたま寛永本に元の形が残ったに過ぎないとすることもできよう。そこで西行が吉野、熊野の旅から帰京した際に詠んだ十首歌の配列を見ることにする（4）。

永正本

其後、わしの山の、月をながめて、十首の哥をぞ、よみにける。

A 面影のわすられまじき我身かな
名残を人の月にとゞめて

B こん世にも心のうちにあらはさん
やがて入ぬる月のひかりを

C 月見ばと契りをきてしふる里の
人もやこよひ袖ぬらすらん

D たち出て雲間をわけし月影も
またぬけしきぞ空に見えける

E 山陰にすます心のいかなれば
おしまれて入月もあるらん

F 夜もすがら月こそ袖に宿りけれ
むかしの友を思ひいづれは

1 思ひきや雲井のよその月影を
こけの袂にやどすべしとは

O 深にけるうき身の影をおもふまに
はるかに月のかたぶきにける

（室町時代物語大成の翻刻では、和歌の各句に読点が付されているが、この表では省いた）

寛永本

されば常には鷲の御山の月影を詠つゝ、十首哥をぞ讀ける。

A 面影のわすらるまじき別哉
名残を人の月にとゞめて

B こん世にも心の内にあらはさん
あかで入ぬる月のひかりを

C 月見ばと契をきてし古郷の
人もや今宵袖ぬらすらん

D 立出て雲間を分し月影を
待ぬけしきや空に見えけん

E 山陰にすまぬ心はいかなれや
おしまれて入月も有けり

F 夜もすがら月こそ袖にやどりけれ
昔の秋を思ひ出れば

G 捨とならば浮世をいとふしるし有ら
ん　我見ば曇れ秋の夜の月

H 月の入山に心ををくり入て
暗なる跡の身をいかにせん

I 霜さゆる夜半の木の葉をふみ分て
月は見るやと問人もなし

J くまもなきおりしも人を思ひ出て
心と月をやつしつる哉

文明本

仁和寺の御室よりめされてまいりけるに、厭離穢土次第、有為無常のことはり、成仏得道のいんゑん、往生極楽のことはり、こまかにめしとはせたまひて後、やまとこと葉をくちにすさむること、たゞ聖人ばかりなり。同はちすにうまれんために、月の百首をよまんとおもふなり。けちゑん申べきよしおほせられければ、十首のうたをよみてまいらせけり。

a うれしやとまつ人ごとにおもふらん
山の葉いづる秋のよの月

H 月のすむ山に心をおくりいれて
やみになるあとの身をいかにせむ

F 夜もすがら月こそ袖にやどりけれ
むかしのあとをおもひいづれば

O ふけにけり我身のかげをおもふまに
春かに月のかたむきにけり

b 月をまつたかねの雲ははれにけり
こゝろあるべきはつしぐれかな

c 月のみやうはのそらなるながめにて
おもひもいでぱこゝろかよはむ

さても仁和寺の御室より被召て仰に云、厭離穢土欣求浄土の次第、成仏得道の心を讀するに、百首結縁すべきよし、仰の有ければ、十首まいらせける中に、

Kこし方の見しよの夢にかはらぬは
いふもうつゝの心やはする

Lうけ難人のすがたに生れ出て
こりずや誰も又沈べき

M世をいとふ名をだにもさはとゝめ置
て　数ならぬ身の思出にせん

N浮身こそいとひながらも哀なれ
月を詠て年の暮ぬる

O更にける我身の影を思間に
はるかに月のかたぶきにけり

Gすつとならばうき世をいとふしるし
あらん　われにはくもれあきのよの
月

dかくれなくもにすむゝしは見ゆれど
も　我からくもる秋のよの月

eありあけはおもひであれやよこ雲の
たゞよはれつるしのゝべの空

fしたはるゝこゝろや行と山の葉に
しばしないりそ秋のよの月

仁和寺の御室の要請で十首歌を詠んだという広本系の設定は、寛永本では受け継がれているが、永正本ではなくなっている。永正本の「わしの山の月」を詠んだという設定は、広本系との間に寛永本の存在を置かなければ説明できない。また寛永本の和歌に広本系、永正本両方に共通するものがあるのに対し、広本系、永正本のみが共有する和歌のないことも、広本系→寛永本→永正本という先後関係を強く保証している。永正本は、広本系では一つであった十首歌を無理に二つにしてしまった感のある寛永本の形を、再び一つにまとめようとしたのであろう。

以上の例からみても、寛永本が永正本に先行するという秋谷説はほぼ動かないことと思われる。永正本系を検討する際には、まず寛永本を念頭に置かねばならないのである。

三

前節では、永正本が後出本文であり、寛永本を介さねば説明できない、あるいは寛永本によって補い得る箇所のあることを確認した。しかし寛永本が独自に増補した部分、永正本の方が元の形を残している部分も視野に入れる必要があろう。以下、そのような箇所を挙げてみる（いずれも永正本系の独自要素）。

・高も賤も、子を思道に迷（ママ）いぬ人は無ならひぞかし。古も我子を奈良の里に置て、今夜の月を俤に立て、心は暗にあら

ねども子を思ふ道にと詠て、小篠原風待露の消やらで此一ふしを思置、位山の跡を尋てのぼれ共子を思道など申置たり。（寛）

・高きも、賤も、子をおもふ道に、まよはぬ物は、なきぞかし。されば、昔も、さるためし、ありてこそ、此哥はよまれけめ。

人のおやの、心はやみに、あらねども、子をおもふ道にまよひぬる哉（永）

「人の親の…」の和歌は、寛永本ではその一部、永正本では一首そのままが引用されている。これが『後撰集』や『大和物語』に載る、藤原兼輔の有名な一首であることはいうまでもない。『西行物語』では娘を突き放し出家遁世する場面に引かれるので、この和歌が使われることは不自然ではない。ここで注目したいのは波線部である。この「子を奈良に置いて詠んだ」という要素は、『後撰集』『大和物語』にはなく、続く「小篠原…」「位山の…」の原拠である『新古今集』の、

・をささ原風まつ露の消えやらずこのひとふしを思ひおくかな（巻第十八・雑歌下・1822・皇太后宮大夫俊成）

・くらゐ山あとをたづねてのぼれどもこを思ふみちに猶まよひぬる（同・1814・土御門内大臣）

の詞書にも見当たらない。現在、寛永本と重なることを確認し得たのは『沙石集』巻第五末第九話「哀傷歌ノ事」の、

一　昔或人モ、子ヲ奈良ノ都ニヲキテ人ノヲヤノ心ハヤミニアラネドモ　子ヲ思フ道ニマヨイヌルカナ

トヨミ、

一　或人ハ、病ヲモリテ、カギリナリケルニ、ヲザヽワラ風待ツ露ノキヘヤラデ　子ノ一フシヲ思ヒオクカナ（岩波古典文学大系）

であるが、これは『沙石集』でも梵舜本のみに見える説話であり、また寛永本の他の部分に『沙石集』が使われている形跡はなく、両者に関係があるとはいえないようである。しかし『沙石集』の如き説話を永正本に重ねれば、寛永本本文を作ることは可能なので、この部分は寛永本での増補といってよいだろう。

次の例は、一度目の帰京において、西行が同行の西住を絶縁する際に語ったものである。

・胡馬北風にいばえ、越鳥南枝に巣をくふと云へり。鳥獣に至るまでも、旧里を恋る思あり。こゝをもつて東平我墓の上の草は西になびき、西方覚王の慈悲は東にかぶらしめたる。是皆くわいもつに至るまで故郷を忍ぶ謂に、我朝の西信阿闍梨は、やむごとなき聖人也。学問の為に大唐に渡て、六年まで日本の事を不聞侍りけるに、思ひがけず聖教の中より旧里にて持たりし扇を見出して、顔に押当て聲もおしまず泣給ひける。（寛）

・胡馬、北風にいばへ、越鳥、南枝にすをくう、といふ事あり。かゝる鳥けだ物に、いたるまで、故郷をしのぶ思ひあ

り。このゆへに、東平王の草の墓は、西へなびく、西光王の慈悲は、ひがしに、かうぶらしめたり。（永）

「東平」とは後漢の東平思王のことであり、その墓の上の松が都の方に靡いたという故事は、『文選』李善注に記されている。「西方覚王」は、「覚王」が仏の尊称であり、「慈悲は東にかぶらしめたり」と語られていることからすると阿弥陀如来を指すのであろうか。永正本の「西光王」という名称が他書に見えないので、寛永本の方が本来的なのかもしれない。これに続く寛永本の西信阿闍梨の説話は、現在他に同話や類話を見出せない。東平が中国、西方覚王が天竺のこととすれば、三国の体裁を繕うために語られていることになるが、既に東西で対句になっている表現の後では蛇足の感を免れない。やはりこの説話も寛永本で付加されたものであろう。

逆に寛永本で削除、あるいは脱落があったと考えられる箇所もある。

・あるじなく成ける泉をつたへて居たる人のもとに、行てあそびけるに、住馴し人の面影も水にうかびて見ゆることもなかりければ、馴し姿を思ひ出られて、三伏の夏は此泉に向てつく〳〵と諸法の観念をせしか共、三途八難の炎にむせばん時は涼しき泉もあらじかしと覚て、生死無常は何事も角ぞかしと覚し。（寛）

・又、昔のあるじ、なくなりたる泉を、つたへていたる人のもとに行て、あそびけるに、哀あり。すみ馴し人の面影の水にうつり、とゞまりて、見ゆる事の、なかりけるにも、たゞ生死無常は、何事も、かくぞかしと思に、いとゞ物うくて、ふるき思ひといふ題をもて、か様にぞ、

すむ人の、心くまるゝ、泉かな、むかしをいまは、思ひ出つゝ（永）

「すむ人の…」の和歌が一見永正本の独自要素のようであるが、傍線で示した部分は重なっている。ここは『西行上人集』の、

主なく成たりし泉をつたへゐたりし人のもとにまかりたりしに、対泉懐旧といふいふ（ママ）ことをよみ侍しに

すむ人の心くまるゝ泉かな昔をいかに思ひいづらん（501）

のように和歌のある方が本来的と見るべきである。従って永正本にも寛永本を補い得る部分が存し、二本は補完し合う関係にあることがわかる。これは二本に親子関係はないが、共通母胎といえる本の存在したことを示唆している。

右の三例以外の永正本系の独自要素の中には、簡単に元の形を想像できないものもある。

・佛の被仰たるは、縦①戒を破僧成共、けさを掛たらんを打なやまさんは、三世諸佛の真実の御身より血をあやし、一切の天人の眼をくじる也と経には説て侍り。されば破戒無慚の僧成共、打なやますべからず。次第天衆を初て、三宝皆捨給はぬ物也。天②台大師の摩訶止観には、出家は破戒共、在家の持戒には勝たりとこそ侍れ。僧③儀律にも、若人百千歳阿羅漢を供養せんよりも、出家の功徳には不及と云。経

には七宝の財をもて高き三十三天に至まで立たらんにも、出家の功徳には不及と説れたれ。（寛）

・佛のせちには、たとひ戒をやぶりたる僧なりとも、袈裟をかくる程の物を、なやますは、三世の諸佛の御身より血をあやしたる物なり、とまさしく経にも、説れたり。されば、破戒無慙の僧也とも、あやまつべからず。四大天王をはじめ奉りて、三宝は、出家の物を、善哉なり、とほめ給ふ。天台大師、弘法も、百千僧を供養せん功徳も、又、阿育大王の、八万四千の石の塔を、立給ふ利益も、いかでか出家の功徳には、まさるべきとこそ、おほせられたれ。（永）

ここは永正本系において、特に仏教色の濃い部分である。寛永本で原拠を確認すると以下のようになる（5）。①の「縦戒を…くじる也」は、『大方等大集経』巻第五十三の、

若復出家不持戒者。有以非法而作悩乱罵毀呰。以手刀杖打縛斫截。若奪衣鉢及奪種種資生具者。是人則壊三世諸仏真実報身。則挑一切天人眼目。

による。『諸経要集』巻第二や『法苑珠林』巻第十九にも見える文言である。②の「天台大師の…勝たり」は、『摩訶止観輔行傳弘決』二之五の、

出家破戒猶勝二在家持戒一。以三在家戒不レ為二解脱一。

③の「僧儀律にも…不及」は、『摩訶僧儀律』巻第二十九の、

若人百千歳　供養百羅漢　不如一夜中　出家修梵行　縁此之福祚　得離於六百　六千六十歳　三塗之苦悩

④の「七宝の財を…不及」は、『賢愚経』巻第四、

仮使有レ人。起二七宝塔一。高至二三十三天一。所レ得功徳。不レ如二出家一。

による。寛永本はほぼ経文で構成されているのである。ただし「経には」となっていたり、「摩訶止観には」「僧儀律にも」と出典を明記したりするものの、果たしてこれらが直接経典から集成されたかは存疑である。例えば延慶本『平家物語』巻第五末「惟盛身投給事」にも、

出家ノ功徳ハ莫太ナレバ、前世ノ罪業悉ク滅給ヌラム。百千歳之間、百羅漢ヲ供養スルモ、不及二一日出家ノ功徳一ニハ。設有人一七宝ノ塔ヲ建ン事、高サ三十三天ニ至ルトモ、出家ノ功徳ニハ及バジ（勉誠社刊　延慶本平家物語）

という併記が認められるからである。『摩訶僧儀律』を原拠とする文言が原典よりも『平家物語』に近いことは、孫引きの可能性を示唆しているといえよう。

永正本は後半が相違する。⑥の阿育王説話が諸書に見えるものであるのに対し、⑤の「天台大師…」は、今の所『法花直談私類聚抄』巻七、妙音品「十方妓楽事」の（6）、

天台大師隋ノ皇帝ノ御時、十万僧供養ノ導師成下ヘリ。其時妓楽奏也。時文帝名聞ノ思ヲ成下ヘル。…

くらいしか類似のものを見出せない（弘法大師に関して右の要素を持つ説話は未見）。これは『隋天台智者大師別伝』等の、

以今開皇十一年十一月二十三日。於總管金城殿設千僧会。

が源泉なのだろうか。寛永本、永正本に「天台大師」「百千」「供養」の重なりがあることから、どちらかが元の形であったことは推測できるが、即断はできない。

ともかく寛永本成立の方が確実に早いとしても、二本は相補うものとみなければならない。永正本系本文は、寛永本を中心に据えるべきだが、その際には永正本による絶えざる照射が必要である。

四

『西行物語』の中で和歌を無視することはできない。寛永本で百四十首、永正本で百九首と、広本系の約二百首からは量的に後退するものの、増補された和歌は略本系や采女本系よりも多い。広本系に見えない寛永本和歌は他出を全て確認出来るので、それらの他集への入集状況をまとめると次のようになる。

	古新	千載	山家	上人	心中	御合	宮合	追而	備考
20おしむともおしみはつべき此世かは 身を捨てこそ身をば助けめ								637	玉葉集2467、万代集3723
28しらぬまに花をや人の折つらん 枝をかぞえて驚ぞなく									治承三十六人歌合189 御裳濯65
30吉野山麓にふらぬ雪ならば 花かとみてや尋いらまし			565	307	275		49		永、続千載集671
33をしなべて花の盛に成にけり 山の端ごとにかゝるしら雲		69	64	50	7	5			永、御裳濯104、定家八代抄100、三百六十首和歌52
35花にそむ心のいかで残らん 捨はてゝきとおもふ我身を		1066	76	53	10	15			永、月詣集138、御裳濯131
58こん世にも心の内にあらはさん あかで入ぬる月のひかりを		1023		537		14			永、御裳濯435、定家八代抄1609
65霜さゆる夜半の木の葉をふみ分て 月は見るやと問人もなし		1009	521	282	263	43			定家八代抄1712
67こし方の見しよの夢にかはらぬは いふもうつゝの心やはする			761						一生涯草紙にあり 他本なし

73	深入て神路のおくを尋ぬれば又上もなき嶺のしら雲		1278			71	625	略本
76	さやかなる鶯の高根の雲間より影やはらぐる月を見る哉	1879				4	611	歌枕名寄4546 永、略本、玄玉集38、歌枕名寄4639、六華集1840
77	鶯の山月を入ぬと見る人はくらきにまよふ心なりけり		1231	888	388	337		永、略本
83	行ゑなき思は冨士の煙にて打臥とこや浮嶋がはら			1307				略本
84	玉にぬく露にこぼれて武蔵野ゝ草の葉結ぶ秋のよの月			296		194		永、新勅撰集196 歌枕名寄5425
89	泪をば衣川にぞながしける蓄き都を思ひ出つゝ				452	294		
92	吾妻路や忍ぶの里にやすらいてなこその関を越ぞ煩ふ							新勅撰集671 歌枕名寄6964、7046
94	わりなしやあだに命の露と消て野邊にや誰も送り置れん			764			62	永、略本 新統古今集1580
1 22	氣せぬおはり聞こそうれしけれさても別はなぐさまね共		604	805	414	356		永、采女本、月詣集961、定家八代抄727、八代集秀逸63
1 23	此世にて又逢まじき君なればすゝめし我ぞ心みだれし		605	806	415	357		采女本、月詣集962、定家八代抄728
1 24	もろともにながめ〳〵て秋の月ひとりにならん事ぞかなしき		603	778	449	345		永、定家八代抄726
1 25	哀とも心に思ふ程ばかりいはれぬべくは問こそはせめ	838		803	403	352		定家八代抄725
1 29	暁の嵐にたぐふ鐘の音を心のそこにこたへてぞ聞		1149	938	540	115	61	定家八代抄1629
1 34	わたの原遙に波を隔来て都に出し月を見るかな		516	1101				月詣集270
1 36	椿つむあかの折敷のふちなくばなにゝ霰の玉とまらまし			1367	509	372		夫木抄16296

※新古―新古今集、千載―千載集、山家―山家集、上人―西行上人集、心中―山家心中集、
御合―御裳濯河歌合、宮合―宮河歌合、追而―李花亭文庫本「西行上人集」の追而加書、永―永正本
御裳濯―御裳濯和歌集　（閑書集、残集には重なる和歌がないので、この表からは除外した）

この表を見て気付くのは、勅撰集では『千載集』との重なりが多いことである。『千載集』所収の西行歌は十九首、そのうち十三首が寛永本と重なるが、既に二首は広本系にある。その二首を除いた十一首の中にも略本系に二首、采女本系に二首の共通歌があるので（備考欄参照）、『千載集』歌と重なる寛永本独自歌（永正本と重なるものを含む）は七首ということになる。

この『千載集』との重なりでは、122～124（以下、歌番号は特に断らない限り寛永本のもの）が配列も近似している。寛永本によるとこれらの和歌は西住の臨終に際し詠まれたとなっている。各歌集の詞書を見ると、122、124とも「西住」とするのは『千載集』であり、『西行上人集』では124のみに「西住上人」と記される。『山家集』『山家心中集』ではどちらの詞書とも「同行に侍ける（し）上人」となっており、ここからも『千載集』との近さが指摘できる。ただし略本系の西行上人発心記のように、久保家本では「同行」だった人物を西住に比定してしまう例もあり、短絡的に寛永本が『千載集』を利用したとはいえない。しかも配列が122から125までも近似する『定家八代抄』のような存在もあり、やはり『千載集』との関係は慎重にならざるを得ない。寛永本がこれらの歌集のうちどれかを利用したとは思われるが、それを絞り込むことは難しい。

では他の歌集で寛永本での利用を確認できるものはないのだろうか。この点で注目されるのが、東国で詠まれた89である。同歌の載る『西行上人集』『山家心中集』とともに挙げてみる。

（寛）世中に大事出来て、新院あらぬ様にならせおはしまして後、かの事に寄て、奈良の大衆、餘多陸奥国に流されたりけるが、中そんと申所に、彼人〻に行合て都の物語をすれば、涙を流して、さても有ければ、角行合奉りぬるこそ有難候へ。命のあらば物語とをつ国にして思を述と云題にて讀ける中に、

泪をば衣川にぞながしける舊き都を思ひ出つゝ

（上）奈良の僧、とがのことによりて、あまた陸奥国へつかはされしに、中尊と申所にまかりあひて、都の物語すれば、涙ながす、いと哀なり、かゝることはかたきことなり、命あらば物がたりにもせんと申て、遠国述懐と申ことをよみ侍しに

涙をば衣川にぞながしつるふるきみやこをおもひ出つゝ

（心）ならのそう、とがのことによりてあまたみちのくにへつかはされたりしに、中尊（ママ）そと申ところにまかりあひて、宮このものがたりすれば、涙ながす、あはれなり、かゝる事はありがたきことなり、いのちあらばものがたりに

もせんと申て、思のぶべきよしをの〳〵申侍て、遠国述懐といふ事をよみはべりし

涙をばころもがはにぞながしつるふるき宮こを思いでつゝ

秋谷氏はこの和歌を『異本山家集』、つまり『西行上人集』からの増補とみておられるが、三本を比較しても『西行上人集』『山家心中集』いずれを使ったのかは決定できない。ところが寛永本の独自要素である「世中に大事…」云々という文言は、『山家心中集』において「涙をば…」の和歌の前にある、

世の中に大事いできて、新院あらぬさまにならせをはしまして、おんぐしおろして、にわじにをはしますとき、て、まいりて兼賢あざりにあひて、月あかく侍しかば

かゝる世にかげもかはらずすむ月をみるわが身さへうらめしきかな

の傍線部と重なるのである。どうやら寛永本は、『山家心中集』の傍線部を次の和歌の詞書と結合させたらしい。広本系では右の詞書と和歌は、西行が四国に渡る前の場面として取り込まれているが、寛永本はその場面とは無関係に詞書を利用している。『山家心中集』が寛永本の増補に関わっていることは確実であろう。しかしながら右のような例は他には認められず、『山家心中集』にない寛永本独自歌もあるので、『山家心中集』の利用に関しては部分的増補としかいえないようである。

和歌に関しもう一つ気付いたことに触れておきたい。寛永本独自歌はその殆どが西行歌であることを確認できるが、28だけは他人詠を西行のものとしてしまっている。他出の『治承三十六人歌合』『御裳濯和歌集』によれば、この和歌は空仁の詠であることがわかる。空仁は『千載集』に四首入集の勅撰歌人であり、窪田章一郎氏（7）や桑原博史氏（8）により西行の生き方に影響を与えた人物としての位置付けもなされている。寛永本に28が取り込まれたのはその辺りと関係があるのだろうか。ここで注意されるのが『御裳濯和歌集』である。そこで28は、

（題不知）　西行法師

色にしみかもなつかしき梅がえにをりしもあれや鶯のこゑ

梅花に鶯のなくをききてよめる　空仁法師

しらぬまに花をや人のをりつらんえだをかぞへてうぐひすのなく

と西行歌の直後にあり、しかも両歌は梅・鶯という素材が共通する。寛永本では他に『御裳濯和歌集』と三首が重なるが、それらは他集とも重なるので直ちに出典を決定できないものの、28の存在は『御裳濯和歌集』が無視できないものであることを物語っている。

以上、寛永本独自歌について気付いたことを述べてみた。そこには広本系における『新古今集』のような組織的利用（9）ははっきりと見出せない。やはり部分的増補としかいいようがないのである。また全ての和歌を網羅したわけではないし、独自歌が皆同じ時期に増補されたという保証もない。今後は略本系や采女本系との関係も視野に入れつつ寛永本、永正本を検討

してゆくことが課題となるだろう。

五

最後に広本系から寛永本がどのように作られたのかを見ることにする。寛永本（以下、永正本系は寛永本で代表させる）が本文だけでなく、構成をも変えていることは既に指摘されている。広本系、略本系では娘の出家が四国の旅の後にあるのに対し、寛永本では前に位置するのである。つまり場面が移し変えられているのだが、このような移し変えが寛永本における改変の一手法であることを指摘しておきたい。

広本系の三番歌「なにごとにとまるこゝろのありければさらにしも又世のいとはしき」は、寛永本の38に当たる。広本系では在俗時の西行が出家への心情を吐露する際の詠、寛永本では熊野の旅の冒頭での詠として配されている。寛永本は広本系の和歌配列を多く踏襲しているのだが、ここでは大きくずれている。これは和歌ではなく、直前の文言が原因となっているのである。文明本によりその部分を挙げる。

妻子珍宝及王位　臨命終時不随者　唯戒及施不放逸　今世後世為伴侶

と心にかけて、花山の法王は、このもんのゆへにこそ十善のくらいをすてゝ、きの国千里のはまにおもむきて、なちのお山におこなひて、おはりにつゐに仏道にいらせ給ひけり。ぼんなうのくもあつく、名利の家の犬うてども出やらず、因果のひやくかうはくらくして、まねけどもきたりがたし。とめるをきゝてはうらやみ、まずしきを見てはあざけり、夢のうちのたのしみ、浪のうへの月、しづまりがたき心のみして、蜉蝣の虫のあしたにうまれてゆふべにしする、猶憑あり。いづるいきは入いきをまたずして、命をとぢぬ。五よくのきづなにひかれて、つゐにならくのそこにしづむ事を、（中略）このたびいとはずは、たうらいのかなしみなり。（中略）

いつなげきいつおもふべきことなれば　後の世しらで人のすぐらん

いつの世にながきねぶりの夢さめて　おどろく事のあらんとすらん

なにごとにとまるこゝろのありければ　さらにしも又世のいとはしき

寛永本に「いつなげき」「いつの世に」の和歌はないが、他はほぼ同文である。寛永本でのこの部分の熊野への移し変えは傍線部を媒介としている。そしてそこに和歌も伴ったため、熊野の旅と関係のない38が配列されたのである。広本系一番歌「いつなげき」が21となっているのも、この移し変えの際に生じたと思われる。

このような現象は、津の国難波で詠まれた110にも認められる。この和歌は広本系では吉野・熊野の旅を終えて帰京する途

次での詠とされており、四国へ渡る前に配された110の詠歌事情とは全く異なっている。おそらくこれは108、109が江口遊女との贈答歌であることに起因し、距離的に近い地名を有する場面をまとめた結果であろう。もっとも住吉の詠である51は広本系での位置と変らないので全てを移し変えているわけではない。しかしながら寛永本には、関連するものをまとめて整理しようとする傾向があると思われるのである。

広本系なら三度目の帰京で語られる娘の出家が、二度目の帰京に移されているという構成の変化も右の例と同じ姿勢によるものではないだろうか。広本系での二度目の帰京が都の貴顕との贈答歌で終始することに比べれば、娘の出家は遙に緊張感のある場面である。広本系では三度目の帰京以降は旅がなく、娘の出家と西行往生という二つのクライマックスは並立することになる。その二つが分けられることにより寛永本では、一度目の帰京に西行・西住の肉親との再会、二度目の帰京に娘の出家、三度目の帰京に西行往生の場面がくることになる。各場面が『西行物語』において西行の人生の大きな節目であることを勘案すれば、寛永本は整然とした構成を持っているということがわかる。寛永本での構成の変化は錯簡などではなく、意識的なものと考えられよう。寛永本は増補省略とともに、内部の要素を離合集散させることでより整った西行伝を目指したのではないだろうか。

おわりに

以上、寛永本について考察を加えてみた。寛永本に増補・改変の著しいことは確かだが、物語がもとから持っていた西行像までは変えていないようである。仏教的色彩が強くなっていることは、歌人としての西行の後退は意味していない。それは寛永本に新たに和歌が増補されていることから明らかであろう。場面の移し変えの手法からもわかるように、寛永本への変化は、あくまで広本系『西行物語』の枠内でのものである。逆にいえばそれだけ『西行物語』の元来持っていた構築性が強かったために、そのような改変にならざるを得なかったということになるだろう。

注

(1) 久保田淳編『西行全集』（日本古典文学会）による分類。

(2) 本文は嶋中道則氏「『澹庵歌話』—解題と翻刻—」（「国文学研究資料館調査研究報告」6　昭和60・3）による。

(3) 文明本・久保家本本文は『西行全集』による。

(4) 以下、西行歌の本文と歌番号は『西行全集』、その他の和歌は「新編国歌大観」による。

(5) 以下、諸経典の引用は「大正新脩大蔵経」による。

(6) 本文は渡辺守邦氏「法華直談私類聚抄—解説と翻刻—」

（「国文学研究資料館紀要」7　昭和56・3）による。

（7）『西行の研究』百二十四頁（東京堂　昭和37）。

（8）『西行とその周辺』百二十九頁（風間書房　平成元）。

（9）伊藤嘉夫氏「西行物語のたねとしくみ」（「跡見学園国語科紀要」12　昭和39・3）参照。

末筆ながら、貴重な資料の調査・翻刻を御許可いただいた、慶応義塾大学附属図書館に篤く御礼申し上げます。

（やまざき・じゅん　本学大学院博士後期課程）